

無縁社会・有縁社会

毎年、その年の世相を表わす漢字が公募によって選ばれますが、昨年（平成23年）は「絆^{きずな}」という漢字が選ばれました。

これは言うまでもなく、東日本大震災の大規模災害によって、多くの日本人が家族や人と人との繋がりの大切さを改めて知ったことによるものです。

清水寺の森清範^{かんす}貫主は「みなが手をひとつに携えて復興を重ねていこう。そんな願いを込めて書きました」と語っていました。

震災前の日本はというと、家族、地域社会、会社などで、人と人とのつながりがまことに希薄になった、いわゆる「無縁社会」と呼ばれるような社会になっていました。

「他人^{ひと}は他人^{ひと}、自分は自分」という潤いのない社会です。

所在不明の高齢者が次々と明るみになったり身元不明や遺族が引取りを拒否する無縁死が年間3万2千人に上るという異常なことが起きていたのです。

心ある人たちは、このままいけば近い将来、日本の国は滅んでしまうのではないかと何とかしなければ、という危機感を持っていました。

そんな矢先に今回の震災が起きたのです。

これは無縁社会に追い討ちをかけるような災難ではないかと誰もが思いました。

ところが、この大災害のさなか、我が身の危険を顧みず住民の避難活動に当たられた方がたくさんおられたのです。

防災無線で「津波が来ます、高台に逃げて下さい」と住民に避難を呼び続け殉職された二十四歳の女性職員佐藤未希さん。

海岸近くの人を助けようとして津波に飲まれた駐在所のおまわりさん、千田浩二さん。

約二十人の中国人研修生を高台に避難誘導し、自らは逃げ遅れ犠牲になった水産会社の佐藤充さん。

他にも、多くの人々が自らの命を賭して、救助に立ち向かわれたのです。

被災地で示された、こうした人々の勇敢で崇高な姿に私たちは涙しました。また、その後の被災者の人々の立派な振る舞いに重ねて深い感動を覚えました。

私たちは、何としてもこの人たちの為に自分の出来る精一杯の支援をしようと立ち上がったのです。

自衛隊、警察、消防を始め全国の自治体、民間企業、ボランティア団体、個々人にいたるまで、あらゆる人々が支援活動に加わりました。

ある雑誌にはこんなエピソードが紹介されていました。

子供がお菓子を持ってレジに並んでいたけれど、順番が近くなり、レジをみて考え込み、レジ横にあった募金箱にお金を入れ、お菓子を棚に戻して出て行きました。店員さんがその子供の背中に向けてかけた「ありがとうございます」という声が、震えていました。

まことに心温まるエピソードです。

こうして小さい子供さんに至るまで、心を一つにして支援の手を差し伸べたのです。

支援の輪が広がりを見せるにつけ、「私たちはみんなつながっているんだ」という思いを強く持つようになりました。

この「つながっている」というのを仏教では「縁起」と言います。

言わば、この世界は一つの巨大な網のようなもので、すべてのものが因となり縁となり、重々無尽に絡み合っ(つながって)しかもお互いが他を生かしているのです。私に関係のないものはありません。

このことが分かれば、「他人は他人、自分は自分」などと無関心を装っておねくなります。それどころか、何を見ても他人事とは思えなくなるのです。

そこに、人の苦しみや悲しみを我が苦しみや悲しみとする心が生まれるのです。それを「同悲同苦」の心と言います。

そうして、この心の満ち溢れた社会こそ仏教の目指す社会なのです。この社会は、「無縁社会」に対して「有縁社会」と呼べるでしょう。

無縁社会は、「何を見ても他人事にしか見えない」冷たい孤立社会です。有縁社会は「何を見ても他人事とは思えない」暖かい絆社会です。

思えば私たちは、今回の震災によって多くのものを失いました。しかし一方では、「有縁社会」という素晴らしい社会を手に入れようとしています。復興は今やっと緒についたところです。これから長い時間をかけて厳しい復興の道を歩まねばならないでしょう。

しかし、今回の震災で改めて知った「絆」の大切さを忘れずに、ともに助け合い支え合う同悲同

苦の社会を実現することが出来れば、その社会は必ずや人類のお手本になるだろうと思います。
その時私たちは、「今回の大震災は、有縁社会を作るためになくてはならないご縁であったんだなあ」と喜んで受けとめることが出来るのです。
まさに、この世界に無駄なものはないのです。

平成24年2月 「光明寺だより76号」より